

令和2年度 水戸市埋蔵文化財センター企画展

江戸野望の氏

―常陸戦国に名を遺した

武家の歴史―

展示解説シート

序章 江戸氏誕生

江戸氏の系譜は秀郷流藤原氏から始まるとされています。藤原氏の系譜は多岐にわたりますが、秀郷流は、藤原諸流のうち下野国（現在の栃木県）に勢力を張った藤原秀郷を祖とする勢力です。藤原秀郷は別名を田原藤太といひ、大ムカデ退治の伝説で知られる平安時代中期の人物として伝えられています。秀郷は、天慶3（940）年には、平将門の乱の平定者の一人として名を連ねており、その功から鎮守府将軍、下野守などに任じられました。

中世の北関東一帯には、藤原秀郷の子孫を称した豪族が少なからずおり、後に主要な武家として成長したものととしては、江戸氏をはじめとして、小山氏、下河辺氏、小野崎氏、小山氏から分かれた結城氏などが挙げられます。

江戸氏の出自については、不確定な部分も多く、詳らかにならない部分も多いのが実態です。藤原秀郷から数えて5代の子孫・藤原公道が太田太夫に任じられ、久慈郡太田郷（現在の常陸太田市）に着任し、その後、公道の次男、通直が那珂郡川辺郷（現在の常陸大宮市野口）一帯に川辺太夫となり着任。その後、通直の子が那珂郡（現在の常陸大宮市旧緒川那賀）に移り、その地名から那珂氏と称するようになります。

この那珂氏の起りこそが、のちの江戸氏の発祥につながります。南北朝の戦いの際に那珂氏一族が滅亡に陥った時、那珂通景の子、通泰がただ一人生き残り、那珂川沿いの下江戸という地域を本拠とし、江戸氏を称したとされます。これが、江戸氏の発祥とみることが出来ます。

また、通泰の子の通高は、佐竹氏の娘を娶ることで佐竹氏との関係を深めたとされます。嘉慶2（1388）年、南朝方が筑波山塊の難台山に立てこもった際、江戸通高は北朝方として戦い、戦死しました。けれどもその際の戦功が評価され、鎌倉公方足利氏満から、通高の子の通景に河和田、赤尾間（現在の水戸市赤尾間）などの地が与えられました。

そこで通景は、本拠地を江戸城から河和田城へと移し、当時、水戸地方を支配していた大掾氏をも圧迫していきます。この頃、江戸氏は佐竹氏の重臣として力をつけ、ついには常陸国守護に任じられます。

第一章 水戸城奪取

河和田城を本拠地とした江戸通景は、現在の水戸市内原地区一帯の「中妻三十三郎」を経営的基盤とし、次第に大掾氏との争いを激化させていきます。当時、当主が幼少だったことなどから、大掾氏は難台山城の戦いで十分な働きができず、自身の領地に江戸氏の進出を許してしまい、やがて通景の子の通房の代には、江戸氏が大掾氏の拠点である水戸城（当時の馬場館と称されていた）を奪取する事件へと発展します。

応永33（1426）年6月、江戸通房は、大掾氏が代々、鹿島の神の神事とされた青屋祭を府中石岡で執行していたことに目を付け、大掾氏が府中石岡に赴いた隙を突き、密かに夜間に兵を出し、水戸城に攻め入ります。『新編常陸国誌』によれば、この攻城戦には、加倉井氏、河和田城の春秋氏、大足と聞江の外岡氏らが参戦していたとされます。

水戸城奪取に成功した通房は、大掾氏の旧臣であった、青柳・特塚・島田・平戸・箕川諸氏を服属させ、那珂川の下流一帯および瀧沼北岸の吉田郡を支配下に置きます。このうち、とくに瀧沼川の下流一帯に勢力をもっていた島田・平戸両氏はその後、江戸氏の有力な家臣へと成長していきます。

大掾氏が、水戸城を攻略された後も旧来からの大掾氏家臣が深く根をおろしていた地を回復できなかった背景には、江戸氏の背後にいた佐竹氏の影響があったものと考えられます。

こうして、江戸通房は水戸地方の支配を確立して台頭し、佐竹氏の四宿老（小野崎・江戸・小貫・大塚）の一人としてその地位を確立していくのです。

第二章 江戸氏とその城館

中世城館の築城技術は、「土を掘り土を盛る」ことが基本です。そのため、現在も全国に残る中世城館の多くが土で築かれた城でした。石垣や天守などは持ちませんが、それが中世の城の姿なのです。

中世には多くの城が築かれました。今日、茨城県内だけでも750箇所以上の城館が知られています。水戸市内にも数多くの城館が確認されており、そのほとんどが江戸氏やその旧臣に関係するものと考えられています。

近年、水戸市内では江戸氏に関係する城館の発掘調査例が急増しており、新たな発見や、これまで知られていなかっ



江戸氏発祥の地、江戸郷



上空からみた水戸城



水戸城跡埋納銭出土状態

た江戸氏の城館の形態が少しずつ理解できるようになってきました。

多くの武将が戦を繰り広げた中世において、城は有事の際の重要拠点であるとともに、経済や物流の中心、政治・宗教の中核としての機能を持っていました。

江戸氏が、水戸城を最重要拠点として定め、大棟氏から奪取した背景にも、那珂川と桜川の間に挟まれた馬の背状の台地上に立地する城を掌握することで、物流の拠点として恰好の場所を確保する狙いがあったものと考えられます。

水戸城以外にも、江戸氏の重要な城としては、河和田城や長者山城が挙げられます。

河和田の地は水戸城から西の守りとしての立地で、江戸氏の経済基盤である「中妻三十三郷」にも程近いことから、江戸氏が水戸城を本拠としてからも、河和田城を重臣の春秋尾張守に譲り、西の重要な山城としての役割を持たせていました。江戸氏が河和田城をいかに重要な拠点としてみていたかが理解できます。

また、河和田城と並んで北城の重要な城が長者山城でした。長者山城もまた江戸氏の重臣である春秋駿河守の城館と考えられています。城は二重土塁を多用し、幾重にも堀と土塁が巡らされていました。近年の発掘調査では、4.5mもの深さの堀跡が発見されており、いかに堅固な守りであったかが窺われます。出土遺物からは、16世紀後半に堀が埋め立てられたことが明らかになっており、長者山城が佐竹氏の攻撃によって落城した可能性が示唆されます。



河和田城跡土塁積土中の遺物



河和田城跡出土輪宝墨書土器



長者山城跡発掘調査状況



遠台遺跡で検出された堀跡

第三章 江戸氏の南下政策と野望

水戸城に拠点を移した江戸氏は、永正7（1510）年6月20日、江戸通雅・通泰父子の代に佐竹義舜と「一家同位」の盟約を取り交わします。「一家同位」とは、義舜が今より以後、子・孫に至るまで、佐竹氏の下にいる佐竹氏一族と同じく、江戸氏が親戚として待遇するのであって扱することなかれ、とする約束のことです。

佐竹氏との「一家同位」の盟約という後ろ盾を得た江戸氏は、次第に鹿島郡や小鶴荘などの南部地域に向け出兵し、大棟氏との戦端を開きます。その後江戸氏は、大棟氏の領地への侵攻を続けます。

文明13（1481）年、小幡氏との領界争いが勃発した際には、小田・大棟・真壁・宍戸などの連合軍と、小鶴原で合戦が起こります。江戸通長の弟である通治が戦死するなど、被害は小さくありませんでしたが、結果として江戸氏が勝利します。また、天文元（1532）年八月、江戸氏は小幡城の小幡義清を大洗明神下で殺害し、小幡氏を配下として南進政策の足掛かりとしていくこととなります。

鹿島方面への進攻が激化するなか、江戸氏は徳宿城を攻撃しながら、大棟氏方の鹿島・香取・下野の援軍が駆けつけるより前に、徳宿城を落とすことに成功します。

天正16（1588）年には、大棟氏が北条氏と手を結び乱に及んだとして、佐竹氏と江戸氏が協力し大棟氏と争います。江戸・佐竹連合軍は、田余齋（取手山）を攻略し、府中に攻撃を加えたのち、大棟氏との和解に至ります。江戸氏の勢力が最も広がった時期がこの頃でした。

戦国時代の名にふさわしく、常陸内においても武家の争いが激化の一途を辿るなか、江戸氏の勢力が最も拡大したこの時期、策謀渦巻く戦場を渡り歩き、怒涛の戦果を挙げた江戸氏には、どのような未来が見えていたのでしょうか。国内の戦乱に終止符を打つこととなる、豊臣秀吉による小田原攻めまであと2年。彼らにとってあまりにも唐突すぎる最期は、すぐそこまで迫っていました。



取手山合戦の舞台、取手山館跡（小美玉市教委提供）

第四章 兵どもが夢のあと

天正18(1590)年。日本史上、大きな節目となった年です。豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻め滅ぼして、全国統一が成った年とされます。

常陸国においては、秀吉の権力を後盾とした佐竹義宣が常陸統一を果たしました。

佐竹義宣は秀吉の小田原攻めの最中、小田原に参陣し秀吉に恭順の意を表しました。この時、佐竹義宣は秀吉から、最終的に54万5千800石にのぼる領国を保證されます。

水戸城を本拠としていた江戸氏は、当時、常陸国内では佐竹氏に次ぐ有力な大名で、佐竹氏の臣下として働き、その重臣となり、守護代の地位を獲得していました。

しかし、今や戦国大名となった佐竹氏の目には、江戸氏は脅威として映りはじめていたのかもしれませんが。常陸太田を本拠としていた佐竹氏が、常陸統一に際して、新たに拠点を据えようとしたのは、江戸氏の本拠である水戸城でした。佐竹氏は、水戸城を明け渡すよう江戸重通に要求しますが、重通はこれを拒否。ここに、決戦の火蓋が切って落とされます。小田原攻めの同年である天正18年、佐竹氏は水戸城に攻め入るとともに、十城十八砦とされる江戸氏勢の城館に対しても攻撃を加えました。これらの攻勢に耐えられず、江戸氏は遂に瓦解し、水戸地方を160年にわたって支配した常陸の武家の歴史が、ここに終幕を迎えます。

その後、水戸城を奪われた江戸重通は、かねてから姻戚関係を結んでいた結城へと逃れ、結城秀康に優遇されます。現在の結城市内(小田林)には、江戸重通ほか、その家臣の供養碑が今もこのり、その地でひっそりと、江戸氏の終焉を伝えています。



結城市内に残る江戸重通の供養碑

おわりに

多くの武将が、それぞれの胸に野望を抱き、乱世を生きた戦国時代。勝者と敗者という、光と影を生むのは歴史の必然とも言え、その陰影は全国各地に残されています。

「野望」という言葉を耳にしたとき、多くの方が「織田信長の野望」のような、天下統一を成し遂げようとした全国的に「有名」な大名だけに用いることが許される言葉だと考えてしまいがちです。

しかし、野望という言葉は、歴史に大きく名を残した者たちだけに使われる言葉ではない、と私たちは考えます。

戦国時代という乱世において、己が血筋たる「家」を守り、他勢力を下し、領土を広げることこそ、武家社会で、武将たちの誰もが胸に抱いた「野望」であったと言えるのではないのでしょうか。残念ながら、道半ばにして潰え、歴史の闇へと葬られてしまいましたが、もちろん、江戸氏にも野望があったのです。

「歴史は勝者によって書かれる」。そのため、敗者の歴史は、我が国の歴史のなかで煌煌とスポットを浴びる勝者の影で、ひっそりと、地域の暗がりと一緒に隠れてしまっています。

歴史は常に地域から始まります。地域の歴史には、勝者も敗者もありません。中世から近世という、大きな歴史の渦のなか、地方の武家たちがいかにその時代を乗り越えたのか、どのように名を残したのか。敗者の歴史という暗がりのなかから、彼らの抱いた「野望」の輝きを拾い出すことが、地域史探求の醍醐味のひとつであると考えます。

僻くも戦国の世に飲んでいた江戸氏に焦点を当てた今回の企画展が、皆様にとっての、勝者の視点からは見ることができない、地域史について想いを馳せる契機となれば幸いです。

引用・参考文献

- 茨城町史編さん委員会 1995 『茨城町史・通史編』
内原町史編さん委員会 1996 『内原町史・通史編』
小美玉市教育委員会 2013 『取手山館跡 田木谷上玉里線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
財団法人常陸藝文センター 2008 『常陸藝文7月号 江戸氏興亡の跡』
中山信名著 1949 『新編常陸国誌』 宮崎郡恩会編 常陸書房
藤木久志 1977 『常陸の江戸氏』 萩原龍夫編 『江戸氏の研究』 名著出版 所収
水戸市史編さん委員会 1963 『水戸市史 上巻』

令和2年度水戸市埋蔵文化財センター企画展
江戸氏の野望—常陸戦国に名を残した武家の歴史—
令和2(2020)年10月27日 発行

編集 水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター
〒311-1114 水戸市塩崎町1064-1 ⅴ029-269-5090
発行 水戸市教育委員会
印刷 (社)水戸市社会福祉協議会 水戸市身体障害者就業支援施設のみ